

令和7年度入学 盛岡短期大学部 一般選抜 生活科学科 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	生活デザイン	川内 有緒	目の見えない白鳥さんと アートを見にいく	2021 年 pp.40-46・116-117 より 一部改変	集英社インターナショナル
	食物栄養学	熊田 忠雄	拙者は食えん！ サムライ洋食事始	2011 年 pp.222-226 より 一部改変	新潮社

令和7年度 一般選抜

短期大学部
小論文 (90分)

学 科・専 攻 名	ページ
生活科学科 生活デザイン専攻	1～3
生活科学科 食物栄養学専攻	4～5
国際文化学科	6～8

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題並びに解答用紙が異なるので注意しなさい。
- 3 この問題冊子は8ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督員に知らせなさい。
- 5 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙(各学科・専攻別)には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

以下は、全盲の美術鑑賞者 白鳥さんの経験を作者が聞き書きしたものである。この文章を読み、あとの問いに答えなさい。

白鳥さんが生まれたのは1969年。両親はふたりとも晴眼者^{註1}で、親類一円を見回しても視覚障害者はいなかった。そのため、家族には「目が見えない＝苦勞するに違いない」という漠然としたイメージがあり、特に白鳥さんを「けんちゃん」と呼んで溺愛^{できあい}した祖母は、繰返しこう論^{さと}した。

「けんちゃんは目が見えないんだから、ひとの何倍も努力しないとイケないんだよ。助けてもらったらありがたいと言うんだよ」

それを聞いた幼少時代の白鳥さんは、じゃあ、目が見えるひとは努力しなくていいの？ そんなのずるい！ と感じた。

「自分には、目が見えないという状態が普通で、“見える”という状態がわからないから“見えないひとは苦勞する”と言われても、その意味がわからなかった」

実際に白鳥さんは、歩く、食べる、お風呂に入るなどの日常生活に大きな不自由は感じていなかった。しかし周囲の大人からは、「大変だね」「そんなことをしたら危ない」「かわいそう」と言われ続けた。そのたびに「なんで、なんで？ なにが大変なの？」と違和感を覚えた。

(中 略)

やがて白杖^{註2}を使って街を歩けるようになり、中学生になると商店で買い物ができるようになった。高校生になると、各駅停車の電車に乗って旅に出かけた。

「同じ寄宿舎に鉄道オタクの先輩がいて、話を聞いているうちに俺も鉄道が好きになってきて、夏休みになると一緒にSL^{てつどう}に乗りにいったり。静岡の大井川鐵道とか。特に好きなのは各駅停車の旅。乗客がどんどん入れ替わって、いろんな話が聞けて楽しいよね。見えるひとたちがカフェとかで人間ウォッチングするのに似てるのかな」

このころ好きだったのは図工の授業で、先生は、陶芸技法を使って多様な美術作品を生み出すアーティストの西村陽平だった。

「その授業では、テーマだけが与えられて、なにを作ろうと自由だった。手さえ動かしていればおしゃべりをするのも自由」

もちろん音楽も好きだった。初めてひとりで遠くに出かけたのは高校生のときで、両国国技館の中島みゆきのコンサートだった。

そうして行動半径が広がり、ひとつ自由になるたびに、小さいころから感じていた“障害者のあるべき姿”に対する疑問が大きくなった。

「盲学校で教わったのは、障害があるからこそまじめに努力しないとイケない、ということ。たぶん先生たちの中でも『障害者は弱者、健常者は強者』で、欠如部分があるならばそれを補って、できるだけ健常者に近づくべきだ、という先入観があったのだと思う」

——どうして自分たち盲人は「見えるひと」に近づくよう努力しないとイケないんだ。どうして「かわいそう」なんだ。どうして、どうして。ますます大きな疑問になった。

(中 略)

大学生となった白島さんに、気になる女性が現れた。同級生のSさんで、“見えるひと”だった。

「彼女は感覚がいいというか、一緒にいても自然で。例えば一緒に喫茶店に行くと、メニューを読み上げるんじゃなくて、さらっと『これがおすすめだよ』と言ってくれたり、それがよかった」

そんな彼女が、ある日美術館に行きたいと言い出した。

美術館？ デートにいいじゃないか！ と白島さんは思った。

それまで美術館には行ったことがなかったものの、「じゃあ、俺も行くよ、一緒に行こう」と提案。彼女も喜んだ。この日が人生の分岐点になることなど知る由もなく、ふたりは名古屋市内にある愛知県美術館に向かった。総合文化施設の10階にある美術館である。そこでは「エリザベス2世女王陛下コレクション レオナルド・ダ・ヴィンチ人体解剖図展」が開催中だった。

その日、Sさんは言葉を使って展示内容を説明した。初めて足を踏み入れた美術館に、初めて見たアート作品。また、それを見るために集まったたくさんの人々。

こんな世界があったのか、と白島さんは胸を躍らせた。

「展示内容というよりも、美術館の静かな雰囲気とか、なにかもにワクワクしちゃって。いま思うとデートの楽しさと美術館の楽しさが一緒になって、勘違いしちゃったのかもしれないけど！」

(中 略)

好きなひととデートがしたいと初めて美術館に足を運んだ白島さん。その楽しい時間がきっかけとなり、美術館へのアプローチが始まった。

「自分は全盲だけど作品を見たい。誰かにアテンドしてもらい、作品の印象などを言葉で教えてほしい、たとえ短い時間でもいいのでお願いします」と粘り強く美術館に電話をかけた――。

白島さんは別にライフワークにしようなどと思っていたわけではないらしいが、結果的には美術を見る行為を通じて、それまで「見えるひと」に対して感じていた引け目や「見える」と「見えない」の間の壁が取り払われていったという。

そのきっかけになったのは、ふたつのできごとだ。ひとつ目は、最初にひとりで訪れた名古屋市美術館で1996年に行われたゴッホの展覧会。「素描^{※3}が多かった」と白島さんは記憶する。

その日は、とても長い日だったらしい。

いまでこそ白島さんは「自分たちが好きなものを選んで見ていこう」「疲れたらやめよう」というスタンスだが、当時はまだまったくの手探り状態だった。それは、アテンドしてくれた美術館のひとと同じで、その日ふたりはなんと一点ずつ時間をかけてじっくりと全作品を鑑賞した。おかげで全73点を見終わるまでに3時間以上もかかった。

「俺はもうヘトヘトで、そのひともずっとしゃべっていたから、相当疲れたろうなと思って、お礼を言おうと思ったら、向こうから先に『ありがとうございました』って言われちゃって。あれ、どういうことだ!? って。どうやら展覧会の企画側にいても、作品をそこまでじっくり見る機会ってなかったみたいで、むしろありがとうございましたって言われて、驚いた」

助けてくれているようで、実はそのひとも一緒に見ることを楽しんでいた。いつもいつも「ありがとう」と言う側だった白鳥さんが、「ありがとう」を言われる側に逆転した瞬間だった。

ふたつ目は、「目が見えるひとも、実はちゃんと見えてないのではないか」と感じさせる面白いできごとだ。それは印象派の作品展で、アテンドしていたのは松坂屋美術館(名古屋市)の男性スタッフ。何枚かの絵を見たあとに男性は、一枚の作品を前にして、「湖があります」と説明を始めた。そのあとに「あれっ!」と声をあげ、「すみません、黄色い点々があるので、これは湖ではなくきっと原っぱですね」と訂正した。男性は「自分は何度もその作品を見ていたはずなのに、ずっと湖だと思い込んでいた」と驚いている。

それを聞いた白鳥さんも仰天した。

「ええ!? 湖と原っぱって全然違うものじゃないのって。それまで“見えるひと”はなんでもすべてがちゃんと見えているって思っていたんだけど、“見えるひと”も実はそんなにちゃんと見えてはいないんだ! と気がついて。そうしたら、色々なことがとても気楽になった」

(川内有緒『目が見えない白鳥さんとアートを見に行く』, 集英社インターナショナル, 2021 年, pp.40-46・116-117 より, 一部改変)

注 1 晴眼者：目が見える人。特に視覚障害者の側から言う。

注 2 白杖：視覚障害者が歩行するときに使う白い杖。

注 3 素描：彩色を加えないで線だけで描いた絵。デッサン。

問 1 本文では、白鳥さんはどのように美術鑑賞をすると述べられているか。35 字以内で答えなさい。

問 2 美術鑑賞をすることで、下線部のような心境の変化が白鳥さんに生じた理由を 100 字以内で説明しなさい。

問 3 私達の生きる社会では、障害者と健常者など様々な人々が生活している。異なる立場の人々が共に生活するときに、どのようなことが重要であると思うか。本文を踏まえて 500 字以上 600 字以内であなたの考えを述べなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

開国直後に海を渡り、異国の食物について記録を残した者の中で、わたしがとりわけ心魅かれる人物が2人いる。1人は村垣範正、そしてもう1人は青木梅蔵である。2人のそれぞれの使節団における立場は大きく異なるが、ともに洋食に接した時、激しい嫌悪感や忌避感を覚え、その思いを率直に書き記したという点で共通している。

(中 略)

わたしにとってこの2人が愛すべき人間に思えるのは、西洋料理に正面から向き合い、悩み、苦しんだという点にあり、その不器用で一徹な姿に好感を覚えるのである。本書執筆の動機もここにあったと言ってもよい。彼らの日記に出会うことがなければ、初期渡航者たちの洋食との闘いについて関心が芽生えることもなかった。

日本の西洋料理の変遷をたどると、鎖国中、西欧との唯一の窓口だった長崎・出島でオランダ料理を作ったり、それを食べた日本人が先駆者となり、これに開国直後に海を渡った使節団・留学生らの洋食体験と同時期に来日した欧米人の食文化が混じり合って大きく開花した。やがて器用な日本人は西洋料理を日本風にアレンジし、自分たちの料理として定着させていった。その意味で初期渡航者の異国料理体験が現代のわれわれの食生活に一脈通じているということもできよう。

2011年1月、わたしはアメリカへ向かう飛行機の中にいた。水平飛行に移り、食事が運ばれてくると、周囲の日本人乗客たちは何の違和感もなくフォークやナイフを握って肉料理を口に運び、ワインを飲み、パンにバターを塗って食べ、そして食後にはコーヒーを啜^{すす}っていた。その光景を眺めていたら、今から150年前、眼下の太平洋を行くポーハタン号の食堂で馴れぬ洋食と悪戦苦闘しているサムライたちの姿がダブった。彼らもまさしくわれらと同じ日本人だったからである。

交通や情報手段の進歩によって、世界は確かに狭くなった。それに伴い、日本と外国との間にあった食の垣根も低くなった。言い換えれば、今後村垣や青木らのように異国の食べ物に遭遇した時、あれほど驚き、苦しみ、悩む日本人が出現する可能性はほとんどなくなったということである。

事実日本人ほど食べ物に忌避感を持たぬ民族は世界でも稀である^{まれ}とされ、明治になって肉食が解禁されてからというものは、タブーとされる食べ物はほぼ皆無となった。以後生活水準の向上とともに日本人の食生活は急速に洋風化が進み、その結果、米の消費量の大幅減少に象徴されるような伝統食離れが加速した。

その一例を挙げれば、ハンバーガーやフライドチキンなどアメリカのファストフードチェーンの隆盛ぶりである。これらの食べ物が本国を除き、日本ほど短期間に普及・浸透した国は世界でも例がないとされる。昨今の外食不況の中、国内の各牛丼チェーンは値下げ競争にしのぎを削っているというのに、日本マクドナルドの2010年の全店売上高は5,400億円を超え、過去最高を記録した。日本上陸から40年、「マック」は今や日本人の国民食になったと言っても過言ではない。

異食文化を幅広く、食欲に受け入れる日本人はしばしば「味のコスモポリタン」^註などと評される。

しかし、それは必ずしも美食家(グルメ)を意味する「称号」ではなく、単に新し物好きの「雑食民族」に過ぎないのではとの指摘もある。外国の食物へ安易に飛びつく風潮と、その一方で近年海外で急速に高まっている日本食への評価、この相反する現象が何を意味するのか、われわれ日本人も冷静に考えてみるべき時期を迎えている。

(熊田忠雄『拙者は食えん！ サムライ洋食事始』，新潮社，2011年，pp.222-226より，一部改変)

注 コスモポリタン：国籍・民族などにとらわれず，世界的視野と行動力とをもつ人

問 1 作者は開国直後に海を渡った2人の日本人のどこに心魅かれ，好感を覚えたか100字以内にまとめなさい。

問 2 問1を踏まえ，日本人が「味のコスモポリタン」と評されることについてあなたの考えを500字以上600字以内で述べなさい。